HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学習者の既有知識を利用した文法項目の導入 ： 「行く・来る」と「あげる・くれる」の関連性を例として
Author(s)	阿部, 仁美
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 6, 74-82
Issue Date	2002-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45629
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC006_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学留学生センター紀要　第6号　(2002)［研究ノート］

学習者の既有知識を利用した文法項目の導入
－「行く・来る」と「あげる・くれる」の関連性を例として－

阿　部　仁　美

[ABSTRACT] Is it possible to apply the knowledge that has already been learned to improve understanding in future study? This paper attempts to answer the above question with reference to the verbs "iku" and "kuru," and "ageru" and "kureru." This paper suggests that understanding the speaker's perspective with regard to the usage of the verbs "iku" and "kuru" can be helpful in understanding the transfer of ownership of an object (or rights related to an object) with regard to the usage of the verbs "ageru" and "kureru." In addition, it points out that model sentences and exercises in a textbook of Japanese language may obstruct learning of Japanese grammar and cause errors in usage by learners.

1. はじめに

日本語学習の比較的初期に、移動を表す動詞「行く・来る」を学習する。その後、物や物の所有権の授受として、いわゆる授受表現の「あげる・くれる・もらう」を学習する。授受表現の学習の中心は、与え手、受け手は誰か、話し手の視点はどこにあるかなどであり、それを図などで学ぶ。また、付属する練習問題や教師が作るテストも、動詞や助詞の使い分けが中心になっている。しかし、「行く・来る」「あげる・くれる・もらう」どちらも同じく場所から場所へ、人から人への動きを表す動詞である。にも関わらず、従来の教え方だと、学習者はどちらも新しい文法事項として学習しなければならない。そこで、本稿では、先に学習した知識を後の学習へ生かすことができないかを、これら「行く・来る」と「あげる・くれる」を例として考えてみたい。また、「あげる・くれる・もらう」の中で、物や所有権の移動を受け手から表す「もらう」はここでは扱わず、与え手から表す「あげる・くれる」のみを扱う。なお、本稿では「やる・あげる・

さしあげる」「くれる・くださる」の違いは問題とせず、それぞれ「あげる」と「くれる」として扱う。また、文はすべて単文のみを扱い、複文、連体修飾などは扱わない。

2. 「行く」と「来る」

2-1 初級学習者用日本語テキストにおける「行く」と「来る」

まず、初級学習者用に作成された日本語テキスト（以下日本語テキスト）において、どのような例文が掲げられているのかを見てみよう。同時に、文法習得のための練習問題が、逆に習得の妨げになっているのではないかという疑問とともに、練習問題もあわせて検討してみる。

「行く」と「来る」は、ともに日本語テキストにおいて、ふたつ同時に提出される場合が多い。

例１：『みんなの日本語Ⅰ』(財)海外技術者協会1998)
第５課
(1) わたしは京都へ行きます。
(2) わたしはバスで会社へ行きます。
(3) わたしは家族と日本へ来ました。
例２：『Situational Functional Japanese（以下 SFJ） Vol. 1NOTES』
(筑波ランゲージグループ1991)
第２課
(4) きのう郵便局へ行きました。
(5) シャルマさんが大学へ／に行きます。
(6) ブラウンさんが日本へ来ます。

例１では、例文をはじめ、会話、練習問題などの平叙文において、主語として移動をする人はすべて「私」、または「私」である主語を省略したものとなっている。「私以外」の主語があらわれる文はない。例２の文法解説中心の『SFJ・NOTES』では、平叙文において、移動をする人は「私」が省略されたもの、または「私以外」の文であるが、練習問題中心の『SFJ・DRILLS』では、質問に「私」で（または省略して）答える形式のもののみである。

例１・２の練習問題の形式は、どちらも、「どこへ」「なんで」「だれと」

「いつ」を中心としてもので、Yes-No 疑問文に答えるものは「行く」のみである。

2-2 「行く」と「来る」の用法

「行く」と「来る」は、どちらも移動の動作を表す動詞である。「行く」は、移動主体が位置するところから出発し離れていく動作のことである。したがって、発話時点で移動主体が到達点にいるときには使えない。「来る」は逆に、移動主体が、話し手の位置する領域に向かい到着することである。現実に話し手が到達点にいようといまいと、到達点にいると考えて発話しているので、出発点に位置するときには使えない。以上のことをまとめると、次のように表すことができる。×は話し手が位置しないことを示す。

表1 「行く」「来る」の用法

	出発点	到達点
「行 く」	○	×
「来 る」	×	○

なお、次のような文の場合、話し手は出発点を離れ移動した場所から、到達点である「ここ」へ来ると考える。

〔会話1〕〈発話場所；学校〉
A：またあとでここに来るね。

多くの場合、発話がおこなわれるのは、話し手も聞き手も以下のように同じ場所に位置している場合である。〔会話2〕は、AもBも到達点にいるため「来る」を使い、〔会話3〕は、AもBも到達点にいないため「行く」を使い、疑問文とその答が同じ動詞である。2-1でみた日本語テキストにおいても、このような例文、練習問題がほとんどである。

〔会話2〕〈発話場所；学校〉
A：あしたも、学校に来ますか。
B：はい、来ます。

〔会話３〕〈発話場所；学校〉
　Ａ：土曜日に、スポーツクラブへ行きますか。
　Ｂ：はい、行きます。

しかし、次のように、「行く」と「来る」両方が使える文は初級ではもちろんのこと、中級になっても日本語テキストで取り扱われることはあまりない。

〔会話４〕〈発話場所；学校〉
　　〈学校のパーティーの場所；京王プラザ〉
　Ａ：ねえ、あしたの学校のパーティーに来る／行く？
　Ｂ：うん、来る／行く。

特に初級の初期においては、例えばYes-No疑問文に対する「Ｖます」「Ｖません」や、質問に適切に答えることに重点が置かれ、動詞の意味を正確に教えることがおろそかになっているように思われる。

2-3　「行く」と「来る」の誤用

日本語学習者の「行く」と「来る」に関する誤用として、以下のようなものが考えられる。下線は誤用、(→　) は訂正したものである。

〔会話５〕〈発話場所；学校〉
　Ａ：あした、わたしのうちのパーティーに来ますか。
　Ｂ：はい、来ます。(→行きます)

2-1でみた日本語テキストの中では、「来る」のYes-No疑問文は扱われていない。Yes-No疑問文では、〔会話２・３〕のように同じ動詞を使い答えられるものがほとんどであるため、このような誤用が起こると考えられる。つまり、質問に「来る」があらわれ、答に「行く」があらわれるような文も練習問題に必要なのである。

では、どうしてＡもＢも到達点にいない〔会話５〕のＡは「来る」を使うのか。〔会話５〕は、どちらも発話時に到達点にいないが、到着時にＡのみが到達点にいる、または現実にいなかったとしても話し手の領域であ

ることが「わたしのうち」からわかる。すなわち、パーティーにBが来るときには話し手Aは到達点にいるので「来る」を使うことができる。「来る」は、話し手が発話時に到達点にいる場合はもちろんのこと、いない場合も、今いる場所に関係なく発話することができる。しかし、話し手Bはまだ到達点に位置していないので、「行く」を使わなければならない[1)]。発話が電話などでおこなわれた場合なども同じである。

また、以下のような誤用もおこる。Aは到達点におり、Bは現在いる場所を出発してAのいるところへ移動、すなわち「行く」のだが、動詞の本来の意味よりもAと同じ動詞で答えることを考えてしまった誤用であると考えられる。これも、日本語テキストの弊害であると考えられる。

〔会話6〕〈発話場所；学校〉

A：（離れたところから）Bさーん。はやく来てください。

B：ちょっと待ってください。今、来ます（→行きます）。

しかし、「私のうち」「私のいるところ」なので「来る」を使う、とだけ指導してしまうと次のような誤用が起こるので注意したい。

〔会話7〕〈発話場所；学校〉

A：わたしはスーパーで買い物をして、それからうちへ来ます（→行きます）。鍵を貸しますから、先にわたしのうちへ来て（→行って）ください。

3. 「あげる」と「くれる」

3-1 初級学習者用日本語テキストにおける「あげる」と「くれる」

次に、「あげる」と「くれる」の例文を見てみよう。

例3：『みんなの日本語Ⅰ』

第7課

(7) わたしは木村さんに花をあげます。

(8) 山田さんは木村さんに花をあげました。

第24課

(9) 佐藤さんはわたしにクリスマスカードをくれました。

⑽　佐藤さんは妹にお菓子をくれました。

例４：『SFJ Vol. 1、2NOTES』

第３課

⑾　わたしはリサさんに本をあげました。

⑿　鈴木さんはリサさんにテレビをあげました。

第13課

⒀　鈴木さんがわたしにテレビをくれました。

⒁　アニルさんが弟に本をくれる。

例３、４どちらも「あげる」が「もらう」とともに提出され、例３では「くれる」は「てあげる・てくれる・てもらう」とともに提出される。例４では「あげる・さしあげる」「もらう・いただく」「くれる・くださる」の順に提出されている。

例３の練習問題は、「あげる」では、あらかじめ与えられた動詞を使い、絵を見て文を作るものと、「なにを」に答えるものである。「くれる」では、「もらう」の文を「くれる」に作りかえるもの、文末を「あげる・くれる」から選ぶものがある。例４の『SFJ・DRILLS』では、絵や会話を見て、あらかじめ与えられた主語に続けて文を作るもの、だれからだれに物が移動したかを名前と矢印で書く練習問題が付属している。

3-2　「あげる」と「くれる」の用法

3-1で挙げた例４の例文をもう一度見てみよう。

⑿　鈴木さんはリサさんにテレビをあげました。

⒀　鈴木さんがわたしにテレビをくれました。

「あげる」も「くれる」も、動作をする動作主は与え手であり、どちらも「鈴木さん」である。「あげる」は、「私」に代表される話し手から見て、話し手以外への物や物の所有権の移動である。「くれる」は逆に、話し手以外から話し手に向かっての、物または物の所有権の移動である。

では、「鈴木さん」「リサさん」のように話し手以外が与え手、受け手になる場合には、話し手と話し手以外とはどのような関係があるのであろうか。

⑿　鈴木さんはリサさんにテレビをあげました。
⑿′　鈴木さんはリサさんにテレビをくれました。

「あげる」は話し手側から見ているのであるから、「私」に近い存在である。ということは、⑿は、「鈴木さん」のほうを話し手は、近い存在であると思っていることがわかる。また、「くれる」はその逆であるため、⑿′は、「リサさん」のほうが話し手に近いということがわかる。ここでいう「近い」とは、第一に話者との血縁関係を含意するか、たとえそのような血縁関係になくとも、心理的に近いものを話者の「身内」として表す。また、「あなた」に代表される聞き手は、話し手以外より話し手に近いが、話し手寄りの話し手以外より遠いと考えられる。これを、話し手から見て身近なものの順位として、

〔　話し手＞話し手以外（話し手寄り）＞聞き手＞話し手以外　〕

ということができる。以上のことをまとめると、次のようになる。
×は話し手が位置しないことを示す。

表2　「あげる」「くれる」の用法

	与　え　手	受　け　手
「あげる」	話し手 話し手以外（話し手寄り）	×
「くれる」	×	話し手 話し手以外（話し手寄り）

3-3　「あげる」と「くれる」の誤用

堀口（1984）によると、「中級になっても、授受表現を適切に使用できるのは50％程度で、あとの50％は、誤用であったり、あるいは使うべきところまたは使った方が自然であるところに使えない状況」である。日本語の授受表現は、その規則や使い方が理解できたとしても、それを適切に使いこなせるようになるのは大変難しい表現である。
ここでは主に、「あげる」と「くれる」の混同について検討する。下線は誤用、（→　）は訂正したものである。

1）木村さんはわたしに花をあげました（→くれました）。
2）鈴木さんにわたしはテレビをくれました（→あげました）。

1）の受け手が話し手である「私」であるので、与え手の「木村さん」が話し手寄りになることはない。2）の与え手は、話し手である「私」なので、受け手の「鈴木さん」も話し手寄りにはならない。

なお、「あげる」と「くれる」混同のほとんどが、「くれる」と使うべきところを「あげる」としてしまったものであり、その逆は少ない（市川1997, 堀口1984）。

4. 「行く」「来る」と「あげる」「くれる」

「行く」は、話し手が到達点にいるときには使うことができない。また、「来る」は、話し手が出発点にいるときには使うことができない。これを「あげる」と「くれる」に重ね合わせて考えてみると、与え手側から物が出発し、受け手側に到着すると図式化できる。物または物の所有権の与え手を出発点、受け手を到達点と置き換えて考えることができるのである。「あげる」は、話し手（または話し手寄りの話し手以外）が物の到達点である受け手になることができない。また、「くれる」は話し手（または話し手寄りの話し手以外）が物の出発点である与え手になることができない。以上をまとめると、次のようになる。×は話し手が位置しないことを表す。

表3　「あげる」「行く」と「くれる」「来る」

	与え手、出発点	受け手、到達点
「あげる」 「行　く」	話し手 話し手以外（話し手寄り）	×
「くれる」 「来　る」	×	話し手 話し手以外（話し手寄り）

これらのことを3-1で挙げた日本語テキストの例文で考えてみると、「あげる」「くれる」を「行く」「来る」の文でパラフレーズすることができる。もちろん、「行く」も「来る」も移動主体は人であるが、物を擬人化して表すと下のような文になり、物の移動がよくわかる。

⑿　鈴木さんはリサさんにテレビをあげました。
　　⇒⒂“鈴木さんのテレビは、リサさんのうちへ行きました。”
⒀　鈴木さんがわたしにテレビをくれました。
　　⇒⒃“鈴木さんのテレビは、わたしのうちへ来ました。”

⒂⒃の文はいささか不自然な文だが、授業の際絵カードなどを使い説明すると、移動方向の理解が深まると考えられる。

5. まとめ

確実に習得された文法項目を、次の学習に生かすということは大変有効なことだと考えられる。本稿では、「行く・来る」の出発点から到達点へ向かう方向性をしっかり覚えさせることにより、誤用の多い「あげる・くれる」の理解を促進することができることをみてきた。さらに、「あげる・くれる」のしっかりとした理解が、その後学習する補助動詞用法「てあげる・てくれる」を学習する基礎知識として有効になると考えられる。このような関連性のあると思われる文法項目は、他にもいろいろと考えられる。今後さらに、学習者の習得したものを生かすべく、導入順序をも考えた文法項目の関連性について考えてみたい。

注：

1）大江（1975）によると、「クルは動きそのものよりも「到達」に特に注意をひきつける動詞」である。

参考文献：

市川保子（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社
大江三郎（1975）『日英語の比較研究』南雲堂
㈶海外技術者協会（1998）『みんなの日本語Ⅰ』スリーエーネットワーク
筑波ランゲージグループ（1991）『Situational Functional Japanese Vol.1,2 NOTES, DRILLS』凡人社
堀口純子（1984）「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』52号 pp.91-103